

氏 名	久 保 真 人 <sup>こと</sup>
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 356 号
学位授与の日付	平 成 11 年 1 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ス ト レ ス と 自 己 効 力 感 に よ る バ ー ン ア ウ ト の 因 果 モ デ ル の 検 証

(主査)

論文調査委員	教 授 清 水 御 代 明	教 授 苧 阪 直 行	教 授 寶 月 誠
--------	---------------	-------------	-----------

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年ヒューマン・サービスの現場で注目を集めているバーン・アウト（燃えつき）症候群について社会心理学的に究明しようとしたもので、6章からなる。

第1章では、バーンアウト発生の社会的背景と従来の研究の特徴が要約的に示される。バーンアウトの現象が人々の関心をひくようになったのは、ヒューマン・サービスの需要が急増した1970年代中期以降のことであり、その社会的背景として、現代社会における人々の孤立化、人間関係の希薄化の進行によって、ヒューマン・サービス従事者の負担が過重になったという事情が指摘されている。さらに今後ヒューマン・サービスの需要の増大はますます加速すると予想され、バーンアウトの原因の究明とその対応策の構築は急務であるといえる。これに対して、これまでのバーンアウト研究は、臨床的、事例的な視点からのアプローチが中心であり、個々の事例については深く検討されているが、その発症の原因や症状、並びにその対処法の系統的な研究は乏しい。ヒューマン・サービスへの需要の高まりを考慮すれば、個々の事例への対応には限界があり、組織としての対応を迫られる時期にきている。社会心理学的観点からバーンアウト発症と症状の包括的な因果モデルを提案し、それを検証することが本論文の目的である。

第2章ではバーンアウトの諸定義と測定法が検討される。実証的なバーンアウト研究は、バーンアウトの測定の取り組みから始まった。測定尺度によって概念は操作的に定義される。代表的な測定尺度にはMaslach Burnout Inventory (MBI) と Burnout Measure (BM) とがある。両者の最も大きい違いは、MBIが多次元的な尺度であるのに対し、BMはストレスの結果生じる消耗感という観点だけからバーンアウトを定義しようとしている点にある。論者は、この両者の違いが現在バーンアウト研究が直面する基本的な問題に結びついていると指摘する。バーンアウトをストレスの結果生じる消耗感に限定することは、バーンアウトという現象が、従来のストレス研究の枠組みで十分説明可能であることを意味する。あえてバーンアウトという新しい概念を提議するからには、既存の概念からは得られない新しい研究上の視点や研究成果のもたらす利点を示す必要がある。しかし、多次元的な尺度であるMBIを用いた研究においても、ストレス要因とバーンアウトとの関連を検証する研究が主で、「ストレスの結果生じる消耗感」以上の視点はいまだ提出されていない。バーンアウトとは何で、どのような要因がその発症に関わっているのか、あらためて検討する必要がある。

第3章では発症の因果関係に関する従来の研究が詳細に検討される。従来の研究では、バーンアウトの原因を個人要因と環境要因との相互作用によるストレスに帰するモデルが広く受け入れられてきた。環境からの要請（ストレッサ）に対して、個人の能力や資質では対応できなくなった（と感じた）とき、人はストレスを感じ、ストレスをうまく処理できず累積していくうちにストレインが生じる。ほとんどのバーンアウト研究は、バーンアウトをストレインの一つとして位置づけている。このようなモデルに基づく実証研究の結果得られた知見が、個人要因（性格要因、教育歴、性差）、環境要因（職場環境、職務構造、人間関係）、および対処行動（ストレスへの対処行動、バーンアウトへの対処行動）に整理して示されている。

第4章と第5章は論者が多数の看護婦について行った実証研究の報告と新しいモデルの提案およびその検討に当てられ、

本論文の核心をなす。第4章では、看護婦976名を対象とした調査によりバーンアウトを引き起こす環境要因が検討された。バーンアウトをストレスの結果生じるストレインであると定義することの妥当性を検証するために、従来のストレス研究でストレインとして位置づけられている心身症状とバーンアウト得点との関連が調べられた。バーンアウトがストレインであるとすれば、その前段階として、ストレスの蓄積があり、ストレスの蓄積は心身症状などのストレインを伴っているはずである。相関分析の結果、バーンアウトの3つの下位尺度のうち情緒的消耗感については、ストレインであるとする仮定と斉合する結果が得られたが、脱人格化と個人的達成感については、これらがストレインであるとの仮定を支持する結果は得られなかった。同様に、バーンアウトがストレインであるとすれば、その背景にストレスを引き起こすストレスが存在するはずである。看護婦が日常業務で経験すると思われるストレスとバーンアウト得点と関連を調べたところ、情緒的消耗感と脱人格化についてはストレスの存在によりそれらの程度が高まっているという結果が得られたが、個人的達成感についてはストレスとの関連はみとめられなかった。上述の心身症状での結果と考え合わせると、バーンアウトの構成要素とされている個人的達成感の後退はストレス以外の要因により引き起こされている可能性が示唆される。この結果は、従来のバーンアウト研究の基本的な枠組みとなってきたストレス累積による因果図式に斉合しない。特に、バーンアウトの3つの側面のうち、個人的達成感は心身症状との関連が低く、ストレスにより説明される部分は他の2つの側面に比べて極端に低い数値を示した。MBIの3つの下位尺度のうち、情緒的消耗感の因子と脱人格化の因子は相互に関連しているが、個人的達成感の因子は他の2つからは独立した因子として抽出されることが多いという第2章の検討結果と重ねると、個人的達成感の後退は情緒的消耗感や脱人格化とは異なる要因による症状であり、両者はバーンアウトの独立した2つの側面を反映するものであることが示唆される。論者は、個人的達成感と、社会心理学で広く研究されてきている自己効力感との関係に着目し、第5章で、ストレスと自己効力感によるバーンアウトの因果モデルを提案して、看護婦994名を対象とする調査によりその妥当性を検討した。まず、情緒的消耗感と脱人格化にはストレスとの関連が認められるが、個人的達成感にはストレスとの関連は認められないという結果を再確認し、次いで、自己効力感によるバーンアウトの因果モデルを提案して、共分散構造分析によりその適合性の高いことを示した。バーンアウトには、過剰なストレスによる側面と、自己効力感の喪失に伴って生じる側面との、経路の異なる2つの側面があると主張された。さらに、因果モデルにバーンアウトの結果としての離職意識という要因を設定し、バーンアウトの2つの側面の重要性を、離職意識への関わりという観点から評価して、両者はほぼ同等に離職意識と関わっていることを示した。

第6章にはこの研究の意義と今後の問題点が論じられている。

## 論文審査の結果の要旨

今まで普通にあるいはきわめて精力的に仕事をしてきた人が、急に、あたかも「燃えつきたように」意欲を失って働かなくなり、そのまま離職、転職してしまう者も少なくない。本論文は、このようなバーンアウト（燃えつき）症候群について、新しい観点を提案し、そのモデルを大規模な調査に基づいて実証した労作である。論者によれば、この現象が人々の関心をひくようになったのは、ヒューマン・サービスの需要が急増した1970年代中期以降のことで、現代社会における人々の孤立化、人間関係の希薄化の中で、生活上のさまざまな問題の解決をヒューマン・サービス従事者に依存する人々が増え、この需要の急速な拡大にヒューマン・サービスの現場が対応しきれなくなったことによるという。今後急速に進行するであろう高齢化社会、高度福祉社会において、ヒューマン・サービスの需要はますます増大し、バーンアウトの原因の究明とその対応策の構築は急務だと論じられている。このような状況のもとで、臨床的、個別事例的な旧来の研究と対応には限界があり、その発症の原因や症状、並びに対処法の系統的な研究が必要だという論者の主張にはおおむね同意でき、本論文の主題の社会的意義が認められる。

本論文は、バーンアウトの原因をもっぱらストレスの蓄積に求める従来のモデルが実証データに適合しないことを示し、新たに自己効力感を要因に加えた因果モデルを提案して、調査資料の共分散構造分析によりその適合性の高いことを示したものである。調査資料は2度にわたっていずれも千人に近い対象から得られたもので、バーンアウトに関するわが国で最大規模の資料であり、2回の調査の結果の一貫性も高く、本論文の立論に十分な信頼性を備えるとともに、今後の研究者に貴重な基礎資料を提供するものといえる。

本論文で提案されたモデルの主要な意義は次の点にある。

(1) 理論的意義としては、まずバーンアウトという概念の弁別的妥当性の確立に寄与するという点が挙げられる。1970年代中期にH. J. Freudenbergerにより提議されたバーンアウトの概念は、多くの研究者の関心を引いて急速に研究が蓄積されてきたが、この間、研究の多くはストレスとバーンアウトとの関連性の議論に終始して、当初から指摘されてきた概念の曖昧さ、特にストレス概念からの差別化の問題は解決されないまま現在に至り、ストレスとの関連性を検証する研究が一段落した今バーンアウト研究自体の意義が問い直されている。本論文は、大規模な調査の結果、バーンアウトの発症について、ストレスとは直接関わらない自己効力感に関連する経路が存在することを示した。本研究で提示された因果モデルは、バーンアウトとストレスとの相違を明確化し、バーンアウト概念を精緻化する上での一つの方向性を示したものとしてその意義が認められる。従来からバーンアウトとは「情緒的消耗感」と「脱人格化」および「個人的達成感の後退」の3つの症状を核とする症候群であると定義されてきたが、これら3つの主症状の位置づけは曖昧であった。本論文では、バーンアウトの症状を、累積したストレスからもたらされる症状（情緒的消耗感、脱人格化）と自己効力感の喪失によりもたらされる症状（個人的達成感の後退）とに明確に区別し、さらにそのいずれもが離職意識と高い相関をもつことを示して、バーンアウトの概念を再定義している。

(2) 本論文のモデルは、バーンアウトを抑止するための対処法を考える上で、従来のストレス軽減というプログラムだけではなく、別の可能性、すなわち、自己効力感を高めるためのプログラムを示唆している点で実践的な意義をもつ。自己効力感とは社会心理学や発達心理学、あるいは教育心理学などで広く研究されており、自己効力感を高めるための具体的なプログラムを示しているものも少なくない。バーンアウトと自己効力感との関連性を検討することは、これらの既存のプログラムをバーンアウト抑止のためのプログラムとして適用する可能性を検討することでもある。

(3) 自己効力感という外的に制御可能な要因による説明は、この種の実践的研究一般に対して、次のような方法論的意義をもつと考えられる。同じ環境で働いている人の中でも、バーンアウトする人もいればしない人もいる。従来、この違いは、パーソナリティの差に帰せられてきたが、パーソナリティに原因を求めることは、個人の生活史全般を視野に入れなければならないことを意味するとともに、カウンセリングなどの個別的な対処に終始することにもなる。また、大局的な問題の所在が曖昧になり、効率的で系統的な対処法を検討する道筋を閉ざすことにもなる。これまでパーソナリティに帰せられてきた側面を外的に制御可能な要因により説明しようとするこの方法論的意義は軽視できない。

本論文の主題の社会的意義、資料の高い信頼性、基本的な概念の再定義を含む重要な理論的実践的方法論的寄与を認めた上で、なお注文すべき点も少なくない。たとえば、方法的にはもっぱら同時に収集した資料の変数間の相関研究の手法がとられているが、第6章で論者自身述べているように、因果関係を特定するには同一人の追跡的研究が必要である。また、操作的定義に即してはいても現職の看護婦を対象とする質問紙調査でバーンアウトの実相を把握しきれるかどうか、取り上げられた要因のほかにも、たとえば時間的展望のようにバーンアウトにとって重要な要因が見逃されていないかなど、今後検討されるべき問題も残されている。論者のますますの研鑽を期待したい。

以上審査したところにより博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお1998年11月5日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。